基調講演

「高山社のまちづくり」

今回の基調講演は、高山社を考える会の会長として、高山社跡の世界遺産登録に向け尽力された小坂裕一郎さんにお話いただきました。その概要を報告します。

講師　高山社を考える会　会長　小坂　裕一郎　さん

２００８年に高山社を考える会を設立し、高山社の歴史的価値の周知・啓発に取り組む。保存運動の推進等を通して、世界遺産登録に向けて尽力し、登録後は、学ぶ運動を実践する運動へと変え、更なる啓発に努めている。地元の絹文化の再認識による郷土愛の育成及び歴史文化の高揚を図り、先代の意思を活かしたまちづくり運動を展開している。

養蚕について

養蚕の始まりは、紀元前３千年前後、中国の黄河文明と言われています。日本への伝来は紀元前後と言われ、魏志倭人伝にも卑弥呼が魏の国へ持って行ったということが書いてありますし、弥生時代中期の遺跡からも絹織物が出土しています。日本で安定して養蚕ができるようになったのは、江戸時代と考えられています。鎖国により中国からの輸入が減少したことや、幕藩体制が確立され、各藩の財政立て直し策として養蚕が奨励されたことによります。養蚕方法の文献も多く残されています。

ヨーロッパを中心として大きな打撃を与えた微粒子病等の病気やネズミやウサギ等が養蚕の「敵」でした。中でも一番恐れられていたのは、「コシャリ」などと呼ばれる白彊（はくきょう）病です。白彊病が発生すると、その農家の全ての蚕が死んでしまうのです。白彊病は、乾燥し、ある程度気温の高いところの方がかかりにくいのですが、湿度の高い日本では、どうしても白彊病にやられてしまうことが多くありました。それを防ぐ戦いが養蚕の歴史になります。